

Title	立身出世と〈あんま〉：太宰治「思ひ出」
Author(s)	滝口, 明祥
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 48-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97697
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

立身出世と〈あんま〉

—— 太宰治「思ひ出」

滝 口 明 祥

一、「思ひ出」を歴史的に読むということ

太宰治「思ひ出」(『海豹』一九三三・四―七)を歴史的に読むことは可能だろうか。この作者太宰治の自伝的作品として読まれてきた小説を、ひとまず作者主体から切り離れたうえで歴史的に読むためにはどうすればいいだろうか。二つの方法が考えられる。一つは、物語内容に描かれた時期に関連させるという方法であり、もう一つは、この作品の執筆時期に関連させる方法である。

前者は比較的容易であるように思われる。この作品の冒頭場面を見てみよう。

黄昏のころ私は叔母と並んで門口に立つてゐた。叔母は誰かをおんぶしてゐるらしく、ねんねこを着て居た。その時の、ほのぐらい街路の静けさを私は忘れずにゐる。叔母

は、てんしさまがお隠れになつたのだ、と私に教えて、生き神様、と言ひ添へた。いきがみさま、と私も興深げに呟いたやうな気がする。それから、私は何か不敬なことを言つたらしい。叔母は、そんなことを言ふものでない、お隠れになつたと言へ、と私をたしなめた。どこへお隠れになつたのだらう、と私は知つてゐながら、わざとさう尋ねて叔母を笑はせたのを思ひ出す。

幼い 私 は叔母とともに てんしさま 〓天皇の死という出来事に立ち会う。それは日本の片田舎であるらしい 私 の住む村にも ほのぐらい街路の静けさ をもたらすような出来事である。そしてそこから物語は始まるのだ。そのことは、丸川哲史が言う「大文字の「歴史」との微妙な即心関係^②」をこの作品に見出すことを不可避にするだろう。私 は続けて、私 は明治四十二年の夏の生れであるから、此の大帝崩御のときは

数へどしの四つをすこし越えてゐた」と言つたから、この作品の始まりは明確な歴史的時点を刻印している。ということは、この作品の終わりも明確な歴史的時点を持つことになるだろう。

私は小学校を卒業したあと、高等小学校に通い、この作品の終わりの時点では中学四年生になっている。つまり、この作品は一九二二（大正元）年七月から一九二七（昭和二）年一月までの出来事である。昭和元年は一九二六年二月二十五日から三十一日までの七日間でしかないのだから、「思ひ出」の末尾の部分（空白の一行以後）を除外すれば、まさに鳥居邦朗が言うように、「思ひ出」の時代はぴったりと大正時代そのものということになる⁽³⁾のだ。

冒頭面で、叔母は私に「てんしさまがお隠れになつた」と言い、不敬なことには口にすべきではないということをお教えるが、それに対して「私はお隠れになつた」という言葉の意味をスラスラすることによって叔母を笑はせることに成功する。つまり私には「敬——不敬」というような評価軸それ自体を無効化するような実践を行っているのであり、叔母もそれに付いて咎め立てることはない。このことは天皇の存在感が明治に比べて相対的に低い「大正」という時代の始まりを象徴的に表しているとも考えられる。そして明治天皇とは違い、大正天皇の死がこの作品で描かれることはない。それは空白の一行において起こつた出来事なのだ。

実際、この作品の随所に「大正」という時代の刻印を見出す

ことが出来る。私は小学校四五年のころ、末の兄からデモクラシイといふ思想を聞き、母までデモクラシイのため税金がめつきり高くなつて作米の殆どみんなを税金に取られる、と客たちにこぼしてゐるのを耳にして、心弱くうろたへるのだし、中学校では、私は仁侠的な行為から教師につよく両頬をなぐられ、友人たちがストライキの計画を協議することになるのである⁽⁵⁾。

このように「思ひ出」はまさに近代日本の「大文字の「歴史」」に関連づけられることが出来るわけだが、そこにはあくまでも「大正」という限定が附されている。そしてそれが、先ほど挙げた後者の方法を困難にしている原因でもある。

鈴木雄史が言うように、「この作品において、思い出された過去は決して「現在」と接続しない⁽⁶⁾」。描かれるのはあくまでも「大正」であり、「昭和」が始まるとともにこの作品は終わり告げる。この作品は私「が過去を回想している」という体裁になっているようなのだが、私「が回想する現在が描かれることとは決してない」。

ただし、主題という点においてはこの作品を執筆時の状況と関わらせることは可能だろう。周知のように、一九三〇年代は「郷土」「故郷」という主題がきわめて重要なものとして社会的にも文学的にも浮上してきた時代である。「思ひ出」の掲載誌である「海豹」においても「故郷」を主題にした作品が少なからず見受けられる。つまり、この作品は同時代における数多

の作品群と主題を共有しているのだ。

したがって、以下のような問いが惹起される。なぜ、描かれるのは、「大正」なのか。なぜ、私の語りは回想する現在に接続しないのか。「故郷」を主題にした作品群におけるこの作品の特質とは何か。またそれらの問題は、これまで先行研究において様々な解釈の焦点になってきた最後の場面——みよと叔母が並んで写っている写真を見て、私が「似てゐる」と思う場面——の問題とも必然的に絡まっていくであろう。

二、変化する〈故郷〉と家族

「思ひ出」に描かれている故郷とはどこを舞台にしているのだろうか。この問いは通常考えられているほど容易なものではない。なるほど、「思ひ出」は太宰自身の経験を基にしているのだから、その舞台が青森県であるのは当然であると人は言うかもしれない。少し知識のある人であれば、私の生まれた村とは金木村（のち金木町）であり、中学校のある町とは青森市であると得意げに指摘することさえ出来るだろう。しかし、次のことに注意すべきである。すなわち、「思ひ出」の本文には金木村や青森市といった言葉は出てこないものであり、そこに見出されるのは、私の村、故郷、私の田舎、或いは、県でいいちのまち、海のある小都会といった言葉でしかないのだ。安藤宏が的確に指摘するように、「作中には具体的な場所や地名に関する記述が注意深く省かれて」おり、「語り手はそれら一

切を、私の田舎」という一語をもって概括し、都会から見た「ふるさと」一般にまで抽象化して「いることに注意しなければならぬ」⁽⁹⁾。おそらくこのような表現上の微細な特質は、「思ひ出」を太宰治の自伝的作品として、私「太宰治を自明の枠組みとして読む読者には簡単に見過こされてしまつほかないであろう。本稿がそのような立場とは相容れない立場に拠っていることは言うまでもない。

「思ひ出」に描かれる故郷とは、作者太宰にとつての故郷である金木村に限定されない抽象的な空間である。そうした一種の匿名性を帯びた故郷は、しかし静止したイメージとして提示されるわけではない。それは静止するのではなく、動く同一のものに留まるのではなく、変化する。たとえば、私の村は私が高等小学校に入學する頃には、町制が敷かれてゐるのであり、三里ほど離れた汽車のあるまちと往き来するのには、夏は馬車、冬は橇、春の雪解けの頃や秋のみぞれの頃は歩くより他なかつた」とされていた交通手段の不便さは、私が中学三年になった秋には、近ごろまちから新しく通ひ出した灰色の幌のかかつてあるそまつな乗合自動車によってある程度緩和されたことが推測される。

丸川哲史はこの乗合自動車という器——大衆的かつ民主的な交通手段——が、津軽地方にまで来ているといつことは、余すところなく「大正モダニズム」的な物質的基礎が、全国的規模にまで張り巡らされよつとしていた事態を物語っている⁽¹⁰⁾と

述べているが、これは 私の田舎 を「津軽地方」と断定していることを除けば首肯できる指摘であろう。この日本の北方に位置していると思われる 故郷 にも近代化の波が押し寄せているのであり、それは日本が国民国家の確立期に入っていたことを示している。¹⁾

そして他ならない 私 の生家こそその過程において少なからぬ役割を果たしていたことにも注意が必要だろう。私の生家がかなり裕福であることは叙述の端々から推測されるが、そこはまた 私の田舎と東京との通路ともなっている。私の父母は 私 が幼い頃 東京にすまっただけでなく、とされ、私 自身も 余程ながく東京に居たのださうである とされる。そして小学校の頃、村の芝居小屋の舞台開きに東京の雀三郎一座といふのがかかった というのだが、その小屋は 私の父が建てたものなのだ。また、私の長兄は、そのころ東京の大学にあたが、暑中休暇になつて帰郷する度毎に、音楽や文学などのあたらしい趣味を田舎へひろめた とされるのだし、その長兄よりも 私 が親しんでいたという次兄もまた 東京の商業学校を優等で出て、そのまま帰郷し、うちの銀行に勤めてゐた という経歴の持ち主である。つまり、経済的にも文化的にも 私 の生家は 東京 との通路を形成しており、それを通じて 東京 のさまざまなる事物、さまざまな流行が 私の田舎 に広まっていくのだ。故郷 の近代化プロセスにおいて 私 の生家が持っている特権的な位置がそこから看取されよ

う。

そして、そのような 私 の生家もまた、変化と無縁ではない。そもそもこの 私 の生家は、いわゆる「近代家族」という規範²⁾から見たとき、相当異様な家族である。私は自身の家族について、次のように語る。

叔母についての追憶はいろいろあるが、その頃の父母の思ひ出は生憎と一つも持ち合せない。曾祖母、祖母、父、母、兄三人、姉四人、弟一人、それに叔母と叔母の娘四人の大家族だった筈であるが、叔母を除いて他のひとたちの事は私も五六歳になるまでは殆ど知らずにゐたと云つてよい。

私は叔母以外の家族のことは、殆ど知らずにゐた と言つ、幼い 私 が最も親しいのは父母ではなく、叔母なのだ。あまつさえ、乳母の乳で育つて叔母の懐で大きくなつた私は、小学校の二三年のときまで母を知らず、下男がふたりかかつて私にそれを教へたとされるのである。家族関係が下男によつて知られるとは尋常のことではない。しかもこれは単に家族における 私 の特異さを示すものではなく、他の家族においても多かれ少なかれ見受けられる事態なのだ。たとえば、長姉について 私 は 女学校へはひるまでは、曾祖母とふたりで離座敷に寝起してゐたものだから、曾祖母の娘だとはかり私は

思つてゐたほどであつた」と記す。私だけでなく長姉もまた、父母に可愛がられたわけではなかつたらしい。父母と子が強い情緒的結合を成している「近代家族」の姿を、ここに見出すことはかなり困難であると言わざるをえない。父母が子を可愛がり、子が父母を慕つのが自然だとする価値観からすれば、異様だとしが言いよつのない家族なのだ。だが、これこそが「近代家族」という規範が浸透する以前の家族の姿だつたのだと言つことも出来るのではないか。日本において伝統的な「家」から「家庭」(「近代家族」)への移行は、まさに「大正」¹³⁾において、都市の新中間層を中心に起こつたものだと言される。都市から遠く離れた地域にあつた私の生家が「近代家族」の規範から大きく外れていたとしても不思議とするには足らない。

しかし、その一方で、東京との通路を形成していた私の家族は、都市の新中間層の影響を受けることも避けられなかつたはずだ。実際、後述するように、私の母もまた「近代家族」における母親の役割を遂行する場面がないわけではないのだから、私の家族は「家」から「近代家族」への過渡的な形態を有していると見たほうがいだろう。そして時間が経つほどに、前者から後者への移行は進んでいったのではないが、末尾の場面で、父の代から長兄の代にうつると、うちの部屋部屋の飾りつけから、かといふ蔵書や軸物の類まで、ひたひたと變つて行くのを、私は帰郷の度に、興深く眺めてゐたと私が言っていることに注目しよう。すでに私の小学校入学前

に、叔母はその長女夫婦と末娘とを連れて、遠くのまちへ分家していた。そして父が死に、長兄が嫁を迎え、時は確実に私の家族を容れさせていたのである。おそらく父の代に比べ、長兄の代はずっと「近代家族」の姿に近づいていたに違いない。

三、セクシュアリティと主体化

そのように変化する故郷や家族の中で、私もまた変化せずにはいられないはずだ。しかしここで、私の分析に移る前に、作業手順として、私を二つのレベルに分けて捉えておくことが必要だと思われる。すなわち、「語る私」と「語られる私」である。本節と次節における分析は基本的に後者についてのものであり、前者については五節で行つこととする。

「語られる私」は、きわめてエディプス的な主体であるように見える。何故か。それは、私ががまず何よりも自身の欲情を統御する主体としてあるからだ。高等小学校に入学した私は次のように描写される。

その学校は男と女の共学であつたが、それでも私は自分から女生徒に近づいたことなどなかつた。私は欲情がはげしいから、懸命にそれをおさへ、女にもたいへん臆病になつてゐた。「……私は見え坊であつたから、あの、あんまをさへ誰にも打ちあけなかつた。その書の本で読んで、それをやめようと思つたまま苦悶をしたが、駄目であつた。

鎌田広巳は「私」は、性をとおして、根源的に錯綜した自己、その存在の特異性を発見せざるをえなかったこと述べているが、その指摘は正鵠を射ているだろう。私は自身を「欲情」がはげしい存在として捉え、そうした自らの「欲情」を統御する主体として作動する。小学校に入学したころ、弟の子守から息苦しいことを教へられたという。私は、ほどなく自身でそれに類する行為を行うようになる。ある夜、傍に寝てゐた母が私の蒲団の動くのを不審がつて、なにをしておるのか、と私に尋ねた。私はひどく当惑して、腰が痛いからあんまやつてゐるのだ、と返事した。ここでの「あんま」とは、もちろんオナニー（自慰、手淫）のことを指しているであり、私が自己統御する「欲情」とは、まず何よりもその「あんま」に他ならない。私は「あんま」によつて引き起こされる「害」を本で読んで、やめようと思つたまま苦悶をしたと述べているが、それは赤川学が言うように、オナニーに対する「強い」有害論は、明治期末から大正期にかけて、印刷・出版メディアの社会的普及を背景に通俗実用書の体裁で直接・間接に大衆の手に届くようになつてきたことを背景としていよう¹⁶⁾。そのような言説は、特に受験生に対して多大な影響をもたらした。竹内洋は次のように指摘している。

受験勉強の世界とは努力と勤勉の世界である。苦勞しない怠け者は受験生ではない。だから受験滑稽譚に出てくる「

リックスターの名前は「怠雄」である。快楽は努力と勤勉の世界を汚すものだから徹底的に排除される。快楽につながるものは「誘惑」として危険視された。受験生は手淫を異常なほど悩んだ。そしてかれらはそれを記憶力の減退や頭が悪くなるという恐怖で苦悩した。……この種の「快楽」は努力と勤勉の受験空間の「反」世界だつたからである。¹⁷⁾

つまり受験生にとつて、オナニーという「快楽」を抑制することこそが自己を「努力と勤勉の受験空間」に位置づけるための必要条件だつたということだ。「思ひ出」の「私」もまたそうした「受験空間」に囚われた存在だつたと言つてよいだろう。

私は中学校で落第の危険を人から忠告されると、私を、自分を今にきつとえらくなるものと思つてゐたし、英雄としての名譽をまもつて、たとひ大人の侮りにでも容赦できなかつたのであるから、この落第といふ不名譽も、それだけ致命的であつたことを理由として猛勉強に励むこととなる。なにはさてお前は衆にすぐれてゐなければいけないのだ、といふ脅迫めいた考へからであつたが、じじつ私は勉強してゐたのである。三年生になつてからは、いつもクラスの首席であつた。自矜こそは、私において最も重要なものであつたのだ。

赤川学は「オナニーにまつわる修養的不安は、学歴上昇と將來の社会的成功を夢見る立身出世主義とシンクロしていた」と指摘し、戦前におけるオナニー有害論に「自己」が「性欲」を

統御することが単なる個人的な利得であるばかりでなく、社会や国家に対する貢献をもたらす」という論理を見出している。

そしてそれがナショナリズムにつながるものだとし、「大日本帝国のナショナリズムは性欲を抑圧したのではなく、個人が性欲を主体的に管理・善導することを不断に要請し、その主体性をナショナリズムに自発的に服従させようとする戦略をとった」と指摘する。¹⁸⁾この赤川の論は言うまでもなく、フーコーによるセクシュアリティ研究を下敷きとしたものである。フーコーは近代社会における主体化においてセクシュアリティが果たした役割を明らかにしたのだが、そこでオナニーについて次のように述べている。

「ブルジョワジーは、まず彼自身の性こそが重大な事柄であり、脆い宝、知らなければならぬ不可欠の秘密だと考へるところから始めた。……秘密の快楽の中に未来の大切な基質を無駄使いする思春期の若者、オナニーにふける少年という、十八世紀末から十九世紀末まであれほど医師と教育者の主要関心事となったものに関していえば、それは庶民の子供ではなかったし、つまり、身体の規律を教えがおかねばならないような未来の労働者ではなかった。学寮に生活する少年であり、召使や家庭教師、家政婦にかしずかれて、そこで危険にさらされるものがあるとすれば、それは肉体的な力ではなく知的な能力、道義的義務であり、

彼の家族と階級とに対して健康な子孫を保証するという責任であるような、そういう少年であった。¹⁹⁾

他ならぬセクシュアリティを通して、社会的・道徳的な「主体」が形成される。そのような「主体」はやがて国家によって取り込まれ、利用されていくことにもなるだろう。そして家族こそは「多種多様な点と変形可能な関係」とに機能的に結びつけられた「権力である快楽の網の目」に他ならない。もちろんここで言う家族とは「ブルジョワジー」の家族のことであり、つまりは「近代家族」のことだ。

前節で述べたように「私」の家族は「近代家族」の規範から明らかに逸脱しているが、それでも全く無縁であるわけではない。たとえば「私」は、勉強中は、たみといふ女中を傍に置いて、火をおこさせたり茶をわかさせたりしたが、あとになって、たみの代りに年とつた肥えた女中が私へつくやうになり、それが母のさしげねである事を知つた私は、母のその底意を考へて顔をしかめる。「私」の母も、子どものセクシュアリティを管理するという「近代家族」における母の役割を全く遂行していないわけではないのである。

だが、そうした役割において実の母以上に「私」に対して大きな存在感を示していたのは女中のたけだったのではないか。先行研究の多くにおいては、「私」において「母」として機能していた存在として、たけよりも叔母の役割を重視している。も

ちろんそれは、冒頭が叔母との場面で始まっていること、叔母についての追憶はいろいろとあるが、その頃の父母の思ひ出は生憎と一つも持ち合せない。とされていることを鑑みても妥当なものだろう。だが、たけもまた、私にとつて「母」として機能していたことを見過すことはできない。

六つ七つになると思ひ出もはつきりしてゐる。私がたけといふ女中から本を読むことを教へられ二人で様々の本を読み合つた。たけは私の教育に夢中であつた。「……」たけは又、私に道徳を教へた。お寺へ屢々連れて行つて、地獄極楽の御絵掛地を見せて説明した。火を放けた人は赤い火のめらめら燃えてゐる籠を脊負はされ、めかけ持つた人は二つの首のある青い蛇にからだを巻かれて、せつながつてゐた。血の池や、針の山や、無間奈落といふ白い煙のたちこめた底知れぬ深い穴や、到るところで、蒼白く瘦せたひとたちが口を小さくあけて泣き叫んでゐた。嘘を吐けば地獄へ行つてこのやうに鬼のために舌を抜かれるのだ、と聞かされたときには恐ろしくて泣き出した。

ここからは、土俗的な風習と「近代家族的な価値観とが絡み合つて私に対する教育装置を形成していることが見受けられよう。たけは比較的短い期間で、私のもとから離れるが、彼女から教えられた二つの要素、つまり本を読むことと

道徳は、学校教育などの装置と結びつきながら、その後の私の主体化において大きな役割を果たしていくこととなる。

四、さまざまな逸脱の徴候と真理の探究

だが私について見た場合、その主体化においてさまざまな逸脱の徴候が見受けられることも確かだ。たとえば前節で引用した私に欲情がはげしいから、懸命にそれをおさへ、女にもたいへん臆病になつてゐた、という箇所の後には次のような文章が続いている。

私はそれまで、二人三人の女の子から思はれたが、いつでも知らない振りをして来たのだつた。帝展の入選画帳を父の本棚から持ち出しては、その中にひそめられた白い画に頬をほてらせて眺めいつたり、私の飼つてゐたひとつがひの兎にしばしば交尾させ、その雄兎の脊中をこんもりと丸くする容姿に胸をときめかせたり、そんなことで私はこらへてゐた。

ここで二人三人の女の子が帝展の入選画帳の、白い画や兎と併置されていることに注目しよう。それは小学校の頃の、小鳥の卵への偏愛や、中学校での鏡の私の顔へ、片眼をつぶつて笑ひかけたり、机の上に小刀で薄い唇をほりつけて、それへ私の唇をのせたりした、という私の行動にもつ

ながるものだろう。そういつた箇所に大國眞希は「フェティシズム」を見出しているが、それはナルシシズムなども踵を接しつつ、私の多形的な欲動を表していると考えられる。また私は、中学校一年か二年の時期に同じクラスのいるの黒い小さな生徒とひそかに愛し合つたというエピソードを、やはり同時期に意識していたという隣の家の瘦せた女学生と並列させて語る。つまり、この時点で、私にとって同性愛と異性愛は同じようなものとしてあつたらしい。それと関連するものとして、鎌田広巳のように、私に「性的同一性の錯綜混乱」を見出すことも可能だろう。フーコーが批判した精神分析においては、フェティシズムや同性愛といった部分欲動（多形的な欲動）は幼児期においては普通のことであるものの、思春期に入ると、「新しい性目標が与えられ、すべての部分欲動はこの性目標の遂行のために協力するようになる」。つまり、異性を性対象として選び、性目標が生殖機能に結びつく異性愛に収束する。それこそが「正常」な性の発達である、というのがフロイトの理論である。「性生活が正常なものとなるためには、性対象と性目標に向けられた流れが、情愛と官能の二つの側面において正確に一致することが必要」なのだ。また金塚貞文が言うように、「フロイトにとって、幼児の性活動と自慰とは同義語だった」。²⁴ すなわち、あんまもまた先ほど挙げた部分欲動の中に含まれるのであり、精神分析にとってそれらは性の「正常」な発達が阻害され、中途の段階に固着している状態で

あるとされる。つまりそれらは、治癒・矯正すべき「病」或いは「倒錯」に他ならない。

もちろん私にとつてもそうした逸脱の徴候は否認すべき対象であつたろう。特にあんまはひた隠しにすべき秘密であつた。しかしそれは否応もなく他者の目にさらされてしまう。私は顔が蒼黒いことを例のあんまの故であると信じてゐたので、人から私の顔色を言はれると、私のその秘密を指摘されたやうにどきまぎした。私が顔に興味を持つてゐたのは、私にとつて、そこが私自身が見ることが出来ず、私にとつての謎であり続ける領域であつたからに他ならない。私とは何者なのか。私は自己についての真理を追い求めるが、しかしその答えは容易に明らかにはならないだろう。そのとき大きな役割を果たすのが、たけが教えた道徳や本を読むことである。あんまをやめようと私がかまざまな苦心をするのは、その書を本で読んで知つたからであるし、幼い私が父母の愛を求めているのも本の影響によるものだと考えられる。²⁵ 私は本を読むことを通して、性の科学や「近代家族」の概念を学ぶのである。通常、それらは実際の家族や学校教育といった装置と結びつきながら、個々人にとっての真理を形成するはずだ。主体自身には遂に獲得できないものとして、しかしそれ故に強く主体に内面化されるものとして。²⁶

だが、私の場合、どうやらそうした連携がうまくいって

ないようなのである。先述したように、私の実際の家族は私 が 本を読むこと を通して獲得した「近代家族」の概念からは明らかに逸脱しているわけで、そのズレこそが私の懊悩を形成していると言えるだろう。そして、学校はそうしたズレを補訂するのではなく、むしろ拡大する装置として機能してしまっている。私が綴方へ真実を書き込むと必ずよくない結果が起つたのである。父母が私を愛して呉れないといふ不平を書き綴つた時には、受持訓導に教員室へ呼ばれて叱られた。私 にとつて、家族が「近代家族」から逸脱しているということは 真実 以外の何物でもないので、しかし学校はそうしたズレ自体を認めよつとせず、結果としてそのズレを拡大しているのだ。私 にとつて、学校が自己の真理とは結びつかないような場所となつたのも当然だろう。学校で作る私の綴方も、ことごとく出鱈目であつた のであり、私は私自身を神妙ないい子にして綴るやう努力した。さうすれば、いつも皆にかつさいされるのである。

たけが幼い 私 に 道徳 を教えた場面を見てみよう。寺の裏の墓地における次の場面は、まさしく 私 が自己についての真理を追い求める契機として考えられる。

卒堵婆には、満月ほどの大きさで車のやうな黒い鉄の輪のついてゐるのがあつて、その輪をからから廻して、やがて、そのまま止つてじつと動かないならその廻した人は極楽へ

行き、一旦とまりさうになつてから、又からんと逆に廻れば地獄へ落ちる、とたけは言つた。たけが廻すと、いい音をたててひとしきり廻つて、かならずひつそりと止るのだけれど、私が廻すと後戻りすることがたまたまあるのだ。秋のころと記憶するが、私がひとりでお寺へ行つてその金輪のどれを廻して見ても皆言ひ合せたやうにからんからんと逆廻りした日があつたのである。私は破れかけるかんしやくだまを抑へつつ何十回となく執拗に廻しつづけた。日が暮れかけて来たので、私は絶望してその墓地から立ち去つた。

私 は自己の真理を知るために、金輪をまわし続ける。しかし何度やつても、その結果を 私 は自己の真理として受け入れることはできないのだ。この金輪まわしは、中学生になるとトランプ占いへと姿を変える。朝、学校へ出掛けしなには、私の机の上へトランプを並べて、その日いちにちの運命を占つた。ハアトは大吉であつた。ダイヤは半吉、クラブは半凶、スペードは大凶であつた。そしてその頃は、来る日も来る日もスベエドばかり出たのである。私 は自己の真理を否認し続ける。それでも 私 は自己の真理を追い求めざるをえない。

私が三年生になつて、春のあるあさ、登校の道すがらに朱で染めた橋のまるい欄干へもたれかかつて、私はしばら

くぼんやりしてゐた。橋の下には隅田川に似た広い川がゆるゆると流れてゐた。全くぼんやりしてゐる経験など、それまでの私にはなかつたのである。うしろで誰か見てゐるやうな気がして、私はいつでも何かの態度をつくつてゐたのである。「……橋の上での放心から覚めたのち、私は寂しさにわくわくした。そんな気持ちのときには、私もまた、自分の来しかた行末を考へた。橋をかたかた渡りながら、いろんな事を思ひ出し、また夢想した。そして、おしまひに溜息ついてかう考へた。えらくなれるかしら。その前後から、私はこころのあせりをはじめてゐたのである。(傍線引用者)

私 において えらくなれるかしら という意識—— 自矜の高さ——こそが、たけから教えられた 道徳を支える役割を果たしている。うしろで見ている 誰か とは、フーコーであれば規律権力の働きであると言つたさうし、フーコーが批判したフロイトであれば「超自我」のことであると言つたさう。誰か こそが 私 についての真理を握つてゐるはずなのであり、私 はそこから自由になることはできない。立身出世意識と主体化が 私 において強固に結びつてゐることがここからも分かるはずだ。

ただし、ここでも 私 がある種の逸脱を起こしていることには注意が必要である。右の引用の続きにおいて、私 は或

るわびしいはけ口を見つけたのだ。創作であつたと述べているのだから。「……にはたくさんの同類があて、みんな私と同じやうに此のわけのわからぬきのきを見つめてゐるやうに思はれたのである。作家にならう、作家にならう、と私はひそかに願望した。立身出世意識は、ここでは学校——社会のラインからは微妙にすらされてゐる。とは言え、私 は完全にそこから自由になつたわけでもない。私 は相変わらず 受験勉強を続けるのだ。私は秀才といふぬきさしならぬ名譽のために、どつしても、中学四年から高等学校へはひつて見せなければならなかつた のだし、私の学校きらひはその頃になつて、いつそつひどかつた にも関わらず、何かに追はれてゐる私は、それでも一途に勉強 せざるをえない。ここでの 何か は、もちろん先ほどの 誰か と違うものではないはずだ。

私 が 作家にならうと願望するのは、たけが教えた 本を読むこと に関わつてゐる。私は学校が嫌ひで、したがつて学校の本など勉強したことは一回もなかつた。娯楽本ばかり読んでゐたのである。うちの人は私が本さへ読んで居れば、それを勉強だと思つてゐた。しかし先述したように、一方で 私 は 本を読むこと を通して性の科学や「近代家族」の概念を学んでいたのであり、それが 私 の主体化を促進する働きを果たしていることも確かださう。また、私 が小学生の頃、小鳥の卵 を手にいれるために、私の蔵書 をそれと交換していることも注目に値する。つまり、小鳥の卵 が表す多形的な欲

動と本とは対立的な関係にあることがそこから推測できるのだ。

その対立的な関係は、まさに思春期において顕在化する。

私は、二章の終わりにおいて、ようやく「正常」な発達段階に差し掛かったように思われる。つまり、私の多形的な欲動も異性愛秩序に回収される段階にきたのだ。もちろんそれは

私が みよ という性対象を発見したことを指して言っているものであり、それには、赤い糸の話と、ある露西亜の作家の名だかい長編小説とが大きく関わっている。赤い糸とは男女のペアが運命によって定まっているという話であり、しかもそれは、学校の国語の教師によって教えられたものなのだ。そのロマンティック・ラブ・イデオロギーに導かれるようにして私はみよへの思いを募らせる。赤い糸と言へば、みよのすがたが胸に浮んだ。また、名だかい長編小説のほうは、トルストイの『復活』であると推察されるが、私はその中の貴族の大学生が女中と関係する箇所**に強く反応している**。それによって、ひとつづちに居る者どつしが思つたり思はれたりすることを変にうしろめたく感じてゐたために、みよに就いて譬へほのかにでも心を乱したのが腹立しく思はれるときさへあつたという。私は、みよへの思いを強固なものにするのである。私には、そのふたりがみよと私とに似てゐるやうな気分がしてならなかつた。私がいまい少しすべてにあつかましかつたら、いよいよ此の貴族とそつくりになれるのだ、と思

つた。つまりここでは、学校教育と本とが結びついて、私の多形的な欲動を異性愛秩序へと回収しにかかっているのである。もちろんそこには私の自矜の高さも関わっている。私は、人生のかがやかしい受難者になりたかつたのだ。したがって、私にとつてみよへの思いは単なる恋愛というよりも、思想として感受される。ここでは立身出世意識が通常のそれとは微妙にズレつつも、しかし異性愛秩序の形成をむしろ強化する方向に働いていることが分かる。

もちろん私がそのような段階に到達したのは突然のことではない。それは長い時間をかけて準備されたものだったのである。そもそも一章や二章の前半において孤立感を強調しがちであつた私は、三章においては友人たちと強固な連帯感を獲得している。私はこの友人たちと一日でも逢はなかつたら淋しいのだ。険悪な関係であつた弟とは、既に二章の後半において和解し、私はこの弟にだけはなにもかも許した。そのような強固な「男」同士の関係において、私は女の悪口ばかり言つていたのだと言つた。かつての私からは何と様変わりしていることだろう。私もようやく「男」の仲間入りをしたのだと言つべきかもしれない。さまざまな逸脱の徴候を示しながらも、私は確実に社会的・道徳的な「主体」へと近づいていたのである。もちろん欲情ではなく恋愛であれば、そうした男同士の間で話することに何の差し支えもない。私はみよについて友人たちに打ち明け、しかも中学四年の夏休み

には、みよを見せるために友人たちを故郷に連れて帰る。私たち三人はひるめしどきを楽しみにしてゐた。その番小屋へ、どの女中が、めしを知らせに来るかが問題であつたのである。みよでない女中が来れば、私たちは卓をばたばた叩いたり舌打したりして大騒ぎをした。みよが来ると、みんなしんととなつた。そして、みよが立ち去るといつせいに吹き出したものであつた。かつて、欲情を必死に自己統御しようとし、あんまを誰にも知られないように苦心していた姿とは実に対照的である。

だが、たけが教えた道徳や本を読むことと、家族や学校教育といった装置との連携がうまくいかない。私はやはり自己についての真理を内面化することはできないままでいたはずだ。そんな私にとつて、みよこそが自己の真理を手渡してくれるはずの存在だという思い込みが生じたとしても不思議ではない。もちろんそれは、人生のかがやかしい受難者になりたく思はれたという私の自矜を満足させるような真理でなければならなかつた。しかも、同じ年の秋に私の自矜を傷つける事件が起こる。私が学校で教師から殴られ、友人たちがストライキの計画さえ立てる事態となつたのだ。それは、私が人生のかがやかしい受難者になるための絶好の機会だつたに違いない。だが私はただ狼狽するばかりなのだ。もし私一人のために思つてストライキをするのだつたら、よして呉れ、私はあの教師を憎んでゐない、

事件は簡単なのだ、簡単なのだ、と生徒たちに頼みまはつた。友人たちは私を卑怯だとか勝手だと言つた。結局ストライキは起きずに事件は解決するのだが、この災難は私を暗くした。そして私は次のように思うのだ。みよのことなどしきりに思ひ出された。つひには、みよと逢はねば自分がこのまま墮落してしまひさつにも、考へられた。私にとつて自己の真理を明かしてくれるものは、もはやみよ以外になつたのである。

そこで私は友人たちには秘密にしてこつそり、故郷へと帰る。私はその夜、みよと結婚するに就いて、必ずさけられないうちの人たちの論争を思ひ、寒いほどの勇氣を得た。私のすべての行為は凡俗でない、やはり私はこの世のかなりな単位にちがひないのだ、と確信した。それでもひどく淋しがつた。淋しさが、どこから来るのか判らなかつた。どうしても寝つかれないので、あのあんまをした。みよの事をすつかり頭から抜いてした。みよをよこす気にはなれなかつたのである。欲情は思想として回収されるが、回収しきれない剰余があんまとして放出される様子がここから看取されよう。

もちろん最終的に私は人生のかがやかしい受難者になれはしない。そのとしの冬やすみに故郷へ帰つてきた私は、家の中のどこにもみよの姿を見つけれない。

私に真理を手渡してくれるかに思われたみよは、男によこされて家を出ていたのである。この事件に対する私の

感想は示されない。そこには、ただの空白の一行がある。

五、「母」への逆行

以上述べてきたことをまとめよう。「語られる私」としての私は、さまざまな逸脱の兆候を示しながらも、一章から三章へ向かうにつれて確実に主体化を遂行している。その過程において、たけから教えられた「本を読むこと」と「道徳」という二つの要素が大きな役割を果たしており、私の「自矜の高さがそれを下支えている」と考えられる。また、私の「主体化プロセスは、故郷の近代化プロセスともある程度の並行関係を持っていると言えるだろう」。

だが、私においては一方で、本を読むことや道徳と学校教育や家族との連携がうまくいっておらず、自己についての真理を手渡してくれるかに思えたみよとの恋愛も成就しない。私の「主体化は遂に完成されないのだ。そして空白の一行を挟んで、末尾の場面がある。そこで私は弟とともに、母と叔母とみよの三人が写った写真を目にする。」

母がひとり低いソファに坐つて、そのつしろに叔母とみよが同じ脊たけくらゐで並んで立つてゐた。背景は薔薇の咲き乱れた花園であつた。私たちは、お互ひの頭をよせつ、なほ鳥渡の間その写真に眼をそそいだ。私は、こころの中、どつづくに弟と和解をしてゐたのだし、みよのあのことも、

くづくづくして弟にはまだ知らせてなかつたし、わりにおちつきを装つてその写真を眺めることが出来たのである。みよは、動いたらしく顔から胸にかけての輪廓がぼつとしてゐた。叔母は両手を帯の上に組んでまぶしさうにしてゐた。私は、似てゐると思つた。

私 はみよと叔母が 似てゐると思つた と言つのだが、宮崎靖士が言つよつに「私」の作家以前の『履歴書』が「母恋い」のベクトルによって通底され／読み替えられながら完成される⁽²⁶⁾ という事態が起こっていることは否定できないと思われ。問題はそこでの「母」の性質に関わる。言い換えれば、なぜこの「母恋い」の対象である「母」がただではなく叔母なのか、ということだ。

先述したように、たけもまた叔母とともに私の「母」として機能していたことは疑えない。しかもたけの場合、私に本を読むことと道徳を教えるよつな「母」であつた。それはきわめて「近代家族」的な「母」であり、むしろ「良妻賢母」といふ呼び名が似合つよつな「母」であるだろう。牟田和恵は「国力」の増強を図るつとする近代国家の帝国主義的意図が、健全で頑強な人間をより多く再生産する手段として女性の母性を第一義として称揚し、「良妻賢母」を国策として要請する⁽²⁷⁾と述べているが、このよつな「母」は子どもを立身出世へと駆り立てる「母」でもある。私 が小学校へ入つた翌年

だかのお盆のとき、たけは私のうちへ遊びに来たが、なんだかよそよそしくしてゐた。私に学校の成績を聞いた。私は答へなかつた。ほかの誰かが代つて知らせたやつだ。たけは、油断大敵でせえ、と言つただけで格別ほめもしなかつた。学校の成績を気にし、いい成績を取るよつに圧力をかけてくるのは実の母ではなく、たけなのだ。

それに対して、叔母は全く違う「母」であるといつことが出来るだろう。叔母が私にとつてどのような「母」であつたかは、私が見た夢によく表れてゐる。叔母の胸は玄關のくぐり戸いつぱいにふさがつてゐた。その赤くふくれた大きい胸から、つぶつぶの汗がしたたつてゐた。叔母は、お前がいやになつた、とあらあらしく咳くのである。私は叔母のその乳房に頬をよせて、さうしないでけんせ、と願ひつつしきりに涙を流した。つまり叔母とは私にとつて、まず何よりも赤くふくれた大きい胸を持つた存在であるよつな「母」なのであり、道徳や本を読むことといったことと結びつく「良妻賢母」とは対照的な「母」なのだ。

そのよつに考えたとき、末尾の場面において私⁽¹⁾が遊行する対象がたけではなく叔母であることは意味深い。そしてそれは鈴木雄史が「尻取り式」と呼ぶこの作品の語りの特徴とも関わってくるだろう。鈴木は次のよつに指摘してゐる。

そう、これはほとんど繰り返しなのである。主人公が同

じよつなことを何度もやつてゐるからだ、とも言えよつ。だが、語り手自身が記憶の中をまさぐる姿勢を前面に出し、続いて読者の記憶に働きかける「尻取り式」の語りがなされてゐるといふ流れからすると、同種の話を各所に散りばめたよつな、同一の口調や同じ語りの展開の繰り返しは、主人公だけには還元出来ない。類似した話を語り手が反復してゐるのであり、それが同じことを繰り返す主人公像を作つてゐる。⁽²⁾

しかしこれは言い換えれば、「語る私」としての私⁽¹⁾が物事を系統立てて語つていないことを意味してゐるだろう。私は断片的なエピソードを次々に連ねていく。読者はまるで私の夢の中に彷徨い込んだかのよつであり、戸惑いながらも断片的なエピソードを各自でつなげていくしかない。もはや事態は明らかではなかるよつか。「語る私」は主体化の畏に囚われる手前の次元に遊行した存在なのであり、道徳的・社会的な「主体」からはほど遠い。系統立つた語りなど、この私⁽¹⁾に可能であるはずがないのだ。たとえば次の場面を見てみよう。

母への追憶はわびしいものが多い。私が蔵から兄の洋服を出し、それを着て裏庭の花壇の間をぶらぶら歩きながら、私の即興的に作曲する哀調のこもつた歌を口ずさんでは涙ぐんでゐた。私はその身装で帳場の書生と遊びたく思ひ、

女中を呼びにやつたが、書生は仲々来なかつた。私は裏庭の竹垣を靴先でからからと撫でたりしながら彼を待つてゐたのであるが、たつとつしびれを切らして、ズボンポケットに両手をつつ込んだまま泣き出した。私の泣いてゐるのを見つけた母は、どうした訳か、その洋服をはぎ取つて了つて私の尻をびしやびしやとぶつたのである。私は身を切られるやうな恥辱を感じた。(傍線引用者)

ここで、私が母からぶたれた理由は、読者には容易に理解されるはずだ。もちろん母は、私が勝手に蔵から兄の洋服を出し、それを着ていたことを叱つてゐるのだらう。だが、私はそのような理由にはいつさい触れようとしない。ただ、どうした訳かと述べるだけなのだ。ここでの語りについて、花田俊典は「より徹底して、「私」の内側につくことによつて」……「私」の内的眞実を讀者にささやきかける効果をねらつた戦略を見出ししているが、しかし、そのような語りは中学二年から四年にかけての私においては不可能だつただらう。反対に、「語る私」にとつては、私の外側から、つまり社会の側からこの場面を記述することこそが難しかつたはずである。「語る私」は、私がぶたれた理由について、どうした訳か、としか書けないような存在なのだ。それはたとえば、次のような異様な叙述を生むことになる。

私は苦勞性であつて、いろんなことをほじくり返して気にするものだから、尚のこと眠れなかつたのであらう。父の鼻眼鏡をこつそりいぢくつて、ほきつとその硝子を割つてしまつたときには、幾夜もつづけて寝苦しい思ひをした。一軒置いて隣りの小間物屋では書物類もわづか売つてゐて、ある日私は、そこで婦人雑誌の口絵などを見てゐたが、そのうちの一枚で黄色い人魚の水彩画が欲しくてならず、盗まつと考へて静かに雑誌から切り離してゐたら、その若主人に、治こ、治こ、と見とがめられ、その雑誌を音高く店の畳に投げつけて家まで飛んではしつて来たことがあつたけれど、さつぷりやりそのなひもまた私をひどく眠らせなかつた。私は又、寢床の中で火事の恐怖に理由なく苦しめられた。此の家が焼けたら、と思ふと眠るところではなかつたのである。

ここに見られる罪責感の希薄さは異様としか言ひよつがな⁽³⁴⁾。私自身は自身が犯したさまざま悪事を氣にして眠れないのだが、「語る私」はそれを、苦勞性の一語でもつて片づけてしまふ。しかも、私が犯したさまざまな悪事と、火事が並列され、あたかも両者に質的な差異が全くないかのようなのだ。そもそもあんなに「語られる私」が秘匿したがつていた、あんまについて、罪責感の表明無しに繰り返して記述していること自体が、「語る私」と「語られる私」との断絶を雄弁に物語つていよ

う。

先行研究の多くにおいて「語る私」が作家であることは自明視されている。作家にならうと願った私 が実際に作家 になつて書いていたのがこの作品だ、というわけだ。だが、これまで見てきたように「語る私」とは道德的・社会的「主体」とはほど遠いような存在である。そのような場合の作家 とは、「狂人」の別名に他なるまい。

或いは、その 作家 に「太宰治」といつ名前を付与することも可能だろう。『晩年』という著作集の中で「思ひ出」を読む場合、そのような読み方にはたしかに蓋然性があると言わざるをえない。しかし、以下のことに注意すべきである。すなわち、その「太宰治」とは、戦後に『斜陽』や『人間失格』を書いてセンターシヨナルな死を遂げた「太宰治」ではなく、まして現代においてさまざまなメディアによって流通しているアイコンとしての「太宰治」でもなく、初めての著作集に「晩年」という表題をつけてしまつような、未だ海のものとも山のものとも知れない新進作家としての「太宰治」なのだ、ということ。同時代の読者の位置に身を置くことを試みてみたとき、読者はこの作品を読む際の先入観を幾分なりとも相対化できるかもしれない。

また、そのよつな「語る私」の在り様は、初めに述べた「決して 現在 に接続しない」というこの作品の構造とも関わつてくるだろう。「故郷」についての物語は現在を起点として語ら

れることが多いが、この作品では「語る私」は回想の現在にいてはほとんど触れようとしないのである。そこで語られる内容は「大正」のことに限られている。空白の一行のあとの末尾の部分のみが「昭和」における場面であり、「昭和」が始まつたばかりのところ、唐突に作品は終わりを迎える。作品は決して執筆された時期には接続しない。大原祐治はこの時期における故郷 への関心の高まりについて、次のように述べている。

成田龍一などの指摘にもあるように、昭和十年前後とは故郷 への志向が特に強まつた時期であり、文学の世界でもいち早く小林秀雄が「故郷を失つた文学」(『文芸春秋』昭和八年五月)において 故郷 を問題化している。〔…〕しかし、こう語つた小林自身、昭和二年の日中戦争勃発を境に態度を変化させていく。そして日中戦争開戦後とは多くの者にとつて 故郷喪失 の念が 故郷(としての日本)発見 というナシヨナリズム的発想へとスライドしていく季節であつた。⁽³⁵⁾

「故郷」への関心の高まりはナシヨナリズムに絡め取られていく。それが顕在化するのが日中戦争開戦後であつたとしても、「昭和十年前後」における「故郷」への関心の高まり自体に既にその萌芽があつたと考えたほうがいいだろう。そのような文脈に置いたとき、「思ひ出」における 故郷 の特異性は明らか

だ。私 が帰っていく 故郷 とは 道徳 や 本を読むこと といったことは結びつかない領域にあるのであり、それは「日本」と変換可能なものではなくないのだから。この作品においては、立身出世を通して最終的に国家に絡め取られていくような主体化の在り方こそが相対化されているのである。

「語る私」は道徳的・社会的「主体」からは最も遠い存在であり、したがって如何なる意味でも国家とは結びつかない。それは 作家 であるかもしれないが、同時に社会や国家の側から見れば「狂人」と名づけざるをえないような存在なのだ。

「思ひ出」の始まりと終わりはメビウスの輪のようにつながっている。「母」への逆行を経験した 私 において原初的な記憶として選び取られたのが冒頭の場面だったことは興味深い。そこで 私 は 不敬なこと を口にすべきではないという教えに対して、評価軸それ自体をズラして無効にするような実践を行っていた。「思ひ出」が基調としているのも、まさにそのような実践ではないだろうか。たとえばそれは、近代において立身出世を介して国家と結びつけられてきた「母」という概念を二分割し、しかもそれらを実際の母とは異なる点に配備することによって、近代の言説空間に裂け目を生じさせる。「思ひ出」を読むとは、現在を生きる私たちにとって実に入り込めるような経験に他ならない。

(注) ① たとえば、白井吉見「太宰治論」、『現代日本文学全集』49

一九五四・九、筑摩書房)は「少年期という特殊な一時期がえたいの知れない感受性の成長そのものとして、描き出されている」と述べ、奥野健男「解説」『定本太宰治全集』第一巻、筑摩書房、一九六二・三)は「のびのびとして書かれた素直な自画像である」としている。

(2) 丸川哲史「首都・巡礼・メディア——太宰治『思ひ出』再読」(『10+1』二〇〇二・一一) 『帝国の亡霊』二〇〇四・一一、青土社)

(3) 鳥居邦朗『晩年』論(一)、『武蔵大学日文学会雑誌』二二巻二号、一九八〇・一二)

(4) ちなみに、この冒頭場面は戦時下の検閲においては許されないものであった。「思ひ出」(一九四〇、人文書院)に収録された「思ひ出」の冒頭場面は伏せ字だらけとなっている。松本和也「太宰治「思ひ出」の位置」(『立教大学日本文学』九一号、二〇〇三・一一)参照。

(5) 大正末から昭和にかけて、学生によるストライキ(同盟休校)は流行となっていた。赤松克麿「学生と社会運動」(『改造』一九二五・七)などを参照。

(6) 鈴木雄史「太宰治「思ひ出」の話し法」(『論樹』八号、一九九四・九)

(7) 成田龍一「故郷」という物語(一九九八・七、吉川弘文館)、『同』歴史はいかに語られるか(二〇〇一・四、日本放送出版協会)などを参照。

(8) 安藤宏「海豹」(『国文学』二〇〇二・一一)を参照。

(9) 安藤宏『晩年』と『津軽』(『上智大学国文学科紀要』二二号、一九九五・三)

(10) 丸川前掲論文

(11) 「大正デモクラシー」が実際にはナショナリズムと無縁で

なかつたことは現在さまざまに指摘されている。たとえば、有馬学『国際化』の中の帝国日本(一九九九・五、中央公論新社)は、「当時の日本人による、世界の中の日本という意識は、第二次世界大戦(一九三九〜四五)後の日本の常識からみれば過剰と言ってもいいほどである。そうした人々によるデモクラシー論は、どこかでナショナルなもの語り直しという契機を含んでいる」(11頁)と述べている。

- (12) 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』(一九八九・一二、勁草書房)は「近代家族」の特徴を、①家内領域と公共領域の分離②家族成員相互の強い情緒的結合③子ども中心主義④男は公共領域・女は家内領域という性別分業⑤家族の集団性の強化⑥社交の衰退⑦非親族の排除⑧核家族(18頁)とまとめており、ひとまず本稿においてもこの定義に沿って「近代家族」という語を使用することとする。ただし、「近代家族」の定義については絶対的に正しい一つのものがあるわけではなく、当然時期的・地域的な偏差を考慮に入れる必要があるだろう。

- (13) 牟田和恵『戦略としての家族』(一九九六・七、新曜社)、小山静子『家庭の生成と女性の国民化』(一九九九・一〇、勁草書房)などを参照。

- (14) ここで「抑圧」ではなく「統御」という語を使用しているのは、ミシェル・フーコー『性の歴史―知への意志』(一九八六・九、新潮社)における精神分析への批判的議論を踏まえたものである。フーコーによれば、性は語らるるに抑圧されたのではなく、むしろ盛んに語られることによつて個人に内面化されることとなったのだ。そこでは主体は自身の欲望を抑圧するのではなく、自己統御する存在として捉えらる。渡辺守章「訳者あとがき」は「フロイトの説く『*Das Unheimliche*』は照明であると同時に、遮蔽幕としても捉えられており、

それはこのような二重の資格において歴史的に相対化されなければならぬ」(フーコー前掲書、211頁)と指摘している。精神分析は近代的な主体の説明の理論として優れたものでありながら、その歴史性を隠蔽するものとしても機能していたのであり、まさにそれこそがフーコーによる精神分析への批判的論拠を成している。

- (15) 鎌田広巳「われにその値なし——太宰治「思ひ出」試論として」(大阪成蹊女子短期大学「三一」号、一九九六・三) 草書房、217〜218頁)
- (16) 赤川孝『セクシュアリティの歴史社会学』(一九九九・四、勁草書房、217〜218頁)
- (17) 竹内洋『立志・苦学・出世』(一九九一・二、講談社、99頁)
- (18) 以上、赤川前掲書、233〜234頁
- (19) フーコー前掲書、153〜154頁
- (20) フーコー前掲書、59頁
- (21) 大國眞希『思ひ出論——太宰治における「失楽園」物語』(『無頼の文学』二四号、二〇〇〇・五、『虹と水平線』二〇〇八・二、おつふう、46頁)。また大國は、「根源的な自己から切り離され、言葉で語ること/語られることによつてしが存在しえない「私」は、背後の父的な言語的抑圧から逃れることは出来ない。それにもかかわらず、「私」は根源的な自己を語りたいと欲する(たとえそれが表象の断片に過ぎないとしても)。そのような「私」の物語は必然として、エディプスの世界を発動する(41〜42頁)と指摘している。本稿は同論から多くの示唆を受けつつも、その余りにも精神分析的な枠組の相対化=歴史化として機能することを目指す。
- (22) 鎌田前掲論文。鎌田はまた「広い裏庭に、むかし林檎の木が五六本あつたやうで、どんよりと曇つた日、それらの木に女の子が多人数で昇つて行つた有様や、そのおなじ庭の一

隅に菊畑があつて、雨の降つてゐたとき、私はやはり大勢の女の子らと傘さし合つて菊の花の咲きそろつてゐるのを眺めたことなど、幽かに覚えて居るけれど、あの女の子が私の姉や従姉たちだったのかも知れないという箇所について「幼い「私」が、とりもなおさず「女の子」として、「大勢の女の子」の一員であつたことを意味している」と指摘する。また、私が小学生の頃、おしやれをした際に、女のようになよなよと走つてみせることからそのような徴候は見受けられる。

(23) 以上、フロイト「性理論三篇」、『エロス論集』一九九七、五、ちくま学芸文庫)

(24) 金塚貞文『オナニズムの秩序』(一九八二・三、みすず書房、49頁)

(25) 花田俊典『太宰治のレクチュール』(二〇〇一・三、双文社出版)によれば、幼い私 が上演した「山中鹿之介」や「牛盗人」は「親子の心のかよいあいを扱つたものであり、鳩の家」は「いわゆる「継子もの」である(60～63頁)。本を読むこと を通して 私 のうちに内面化された「近代家族的価値観が前近代的な文芸をもその内に巻き込みつづ自らを強化していく様が看取される。」

(26) フロイト前掲書は近代における、「真理のゲーム」を次のように説明している。「我々は性に、我々が直接的意識において所有していると思つている我々自身の真実「真理の更」に深く埋もれた真理というものをこそ語れと要求するのである。我々は性に向かつて、性の真理を、性がそれについて我々に語つたところを解読することによって語つてやる。性の方は性の方で我々に対して、我々についての真理を、それについて我々の手に捉えられないものを明らかにすることによって語つてくれるのだ。まさにこのゲームによって、

数世紀この方、徐々に、主体についての知が形成されてきた。「…」主体を決定するものに関する知でもあろうが、とりわけ、主体を主体そのものに対して捉えがたくしているものに関する知である」(91頁)。こうして形成された「主体についての知」は「我々についての真理」はさまざまな言葉や装置を介して個々人に内面化され、そのとき人はすぐれて歴史的な意味で「主体」となるだろう。

(27) フロイト「ナルシズム入門」(前掲書所収)は、「高い自我理想を尊重することで、ナルシズムを獲得した人は、必ずしもビドロー的な欲動の昇華に成功したわけではない」のであり、「理想形成によって自我の要求が高まり、抑圧が著しく促進される」と述べている。この「自我理想」は後に「超自我」と同一なものとされる。フロイト「自我とエス」

(28) 『自我論集』一九九六・六、ちくま学芸文庫)などを参照。東郷克美「逆行と変身——太宰治「晩年」への一視点」(『成城大学短期大学部紀要』四号、一九七三・一)『太宰治という物語』(二〇〇一・三、筑摩書房)は作中に出てくるくぐり戸 といった「内と外の境界のメタファ」に注目しつつ、「思ひ出」を社会化的「イニシエーション」をめぐる物語として読み解いており、示唆に富む。

(29) 宮崎靖士「太宰治『思ひ出』の方言記述をめぐって」(『国語国文研究』一一九号、二〇〇一・九)

(30) 牟田前掲書、43頁

(31) 立身出世と「母」との結びつきに関しては、拙稿「ある寡婦が夢みだ風景——井伏鱒二『遙拝隊長』」(『国文学研究』一五〇号、二〇〇六・一〇)も参照されたい。

(32) 鈴木前掲論文

(33) 花田前掲書、52頁。

(34) 「思ひ出」に対して「のびのび」として書かれた素直な自画

像」(奥野前掲論文)というような評価が出るのは、この「語る私」における罪責感の希薄さに拠ると考えられる。

(35) 大原祐治、坂口安吾『吹雪物語』論序説』(『日本近代文学』六二集 二〇〇〇・五)

(36) ミシェル・フーコー、自由の実践としての自己への配慮」⁵『フーコー・コレクション』性・真理』二〇〇六・九、ちくま学芸文庫)は、「真理の支配からのがれるためには、真理のゲームとまったく無縁なゲームをするのではなく、別のやり方でそれを行うこと、あるいは真理のゲームにおいて別のゲーム、別の勝負をし、別の切り札を出す必要があるのです」と述べている。

本文の引用は『晩年』(一九三六・六、砂子屋書房)に拠る。旧字は適宜新字に改めた。